

「荒川区のみなさん、ありがとう！」

小柳 理恵

柳田邦男先生

初めまして。私は一歳になったばかりの娘をもつ、新米ママです。

私は出産するまで、絵本よりも小説を好んで読んでいましたが、最近娘のおかげで、たくさんの素敵な絵本と出会うことができました。

その中でも、荒川区との繋がりを感じ、感銘を受けたのが『まいごになったぞう』です。この絵本は、迷子になったゾウの赤ちゃんが、ジャングルのみんなに助けってもらって、無事に母親の元に戻れるという内容です。

印象に残る場面が二ヶ所ありました。

まず荒川区との共通点を感じたのが、迷子になった赤ちゃんを心配して、キリンやカバが声をかけてくれる場面です。荒川区の皆さんも、娘を連れて歩いているとよく声を掛けてくださいます。私は妊娠中に荒川区に引越しをしてきたので、知り合いは一人もいませんでした。しかし、商店街のお店の方や、散歩中によくお会いする方々が「今日のご機嫌だね」とか、「歩けるようになったんだね」などと娘に話しかけてくれます。また、「今日は暑いから靴

下は脱いだ方がいいんじゃない？」などと教えてくださることもあり、核家族の新米ママには本当にありがたい限りです。

また、途中ワニやライオンが赤ちゃんを食べようとしてますが、赤ちゃんの仕草が可愛くて助けてあげる場面も印象的でした。子をもつ親にとって、このような安全な社会で子育てができたらどんなにいいだろうと思わずにはいられません。しかし実際には凶悪犯罪が増える昨今、子供の安全は常に脅かされています。日常生活のどこにワニやライオンが潜んでいるか分かりません。子供が可愛いからといって助けてもらえる可能性は、残念ながら低いのが現状です。このような危険の多い社会で、荒川区の防犯活動は本当にありがたいです。ボランティアでパトロールをしてくださる皆さんを始めとして、地域の皆さんに見守って頂く中での子育てはとても心強いです。この絵本に寄せて「ありがとうございませす。」と心から御礼が言いたいです。

多くの絵本は、子供にも理解できる、分かりやすい絵と言葉で表現されています。数少ない言葉で表現されているからこそ、読み手は作品に対して、一人一人違った捉えかたをすることができます。私は十人十色の解釈が生まれることこそが、絵本の魅力だと感じています。

私はこの『まいごになったぞう』という絵本には、世界中の人達が目指すべき、平和で安全な理想の社会が描かれていると感じました。そして娘に、この絵本を通して三つのことを伝えたいと思いました。一つは、先ほど述べたように、私達は地域の方々に見守って頂きながら毎日過ごせています。そのことに気付き、感謝しながら生活して欲しいということ。二つめは、その地域の方々や声を掛け合うことの大切さです。「おはようございます。」や「こんにちは。」という言葉から、多くの人と積極的にコミュニケーションをとって欲しいと思います。コミュニケーションの積み重ねが、住みやすい社会を構築すると考えるからです。最後に、この絵本に登場する動物達のように、困っている人がいたら手を差し伸べることでできる人になって欲しいです。助け合いながら生きていくということは、人生の基本です。

また、母親としての意見を一方的に押し付けるのではなく、娘が話せるようになったら、彼女が絵本から何を感じたのか、何を考えたのかということを通じて聞いてみたいです。絵本を一つのツールとして、お互いの考えや意見を交換できる親子関係を築いていくことができたらいいなあと思います。

最後になりましたが、このように日頃考えている

ことを文章にする機会を与えてくださった柳田邦男先生と、関係者の方々に御礼申し上げます。最後までお読みいただきありがとうございました。乱筆にて失礼致します。